

かつて日本には「はだいろ」という名前の絵の具がありました。今では、うすだいたいやパールオレンジという名前がついています。これには、肌色を一つの色に決めてしまうと、異なる肌の色への差別につながるのでは、との意見を受け、文具メーカーが呼び名を変えたという背景があります。

今年5月にアメリカで起きた白人警察官による黒人男性暴行死事件を巡り、人種差別根絶の運動が世界的に広がる中、フランスの化粧品会社が商品名に「白」や「明るい」という言葉を使わないと決めたという記事が新聞に掲載されていました。その理由は、美白の推奨は美しさを画一的にとらえる考えにつながりかねず、偏見や差別につながるからということでした。イギリスやオランダ、アメリカ

力の企業も同様の対応をするとも書かれていました。

以前、インドでは、欧米の映画やテレビの影響で白い肌への憧れが強まっていることに目をつけた化粧品会社が、白い肌への憧れを後押しするCMを多く制作しました。それを疑問に思った女性団体が、美白を強調する化粧品CMに抗議して「濃い肌の色は美しい」という運動を始めたそうです。この運動には、さまざまな国から賛同の声が起こり、化粧品会社は自分たちの間違いを認め、美白を強調するようなCMをやめました。肌の色の違いが偏見や差別につながるのには、色の違いを個性とみず、優劣をつけるためです。これは何も肌の色だけに限らず、さまざまな違いに差をつけてしまう傾向が私たちの意識の中に潜んでいるからと言えます。人はそれぞれ違う条件で生ま

れ育ちます。性や身体の色、思想、信条、文化、慣習などの違いを互いに受け入れ認め合い、同じ人間として尊重し合うことで偏見や差別はなくなっていくのではないのでしょうか。

